

道 徳 部 会

研究主題 人とのかかわりを通して、
よりよい生き方を目指そうとする生徒の育成

1 主題について

今年度は、自分の考えをもち、他者とのかかわり合いを通して、相手の気持ちもとらえながら考え、生き方を見つめたり、考え直したりすることをねらいとして本主題を設定した。

2 今年度の取り組み

月 日	実 践 内 容	月 日	実 践 内 容
4月12日	第1回総合研究会 研究主題設定・年間計画作成	11月6日	第2回総合研究会 授業研究会（矢立中学校）



【教師の説話を聴く様子】

3 研究内容

(1) 授業研究

- ・期 日 平成24年11月6日（火）
- ・会 場 矢立中学校
- ・主題名 2年「家族のきずな」＜4－（6）＞
- ・授業者 長岐 孝子
- ・資料名 「きいちゃん」（アリス館刊 作者 山元 加津子）

① 授業者から

- ・価値について、以前ほぼ全員から家族への不満の声がたくさん出たことがあり、それ以来、この項目について取り上げようと思っていた。
- ・資料については、子ども側からの目線で考えやすい、本資料「きいちゃん」を活用した。
- ・中心発問は当初「きいちゃんが『うんでくれてありがとう。』と話したのは、なぜだろうか」としていたが、同じ資料を使って他の学級で授業を行ったところ、家族への感謝を感想に書く生徒が多く、中心発問を「きいちゃんは、どんな気持ちでゆかたを縫い続けたのだろうか。」にして、今回のねらいにせまるようにした。

② 協 議

- ・あらためて、中心発問を「きいちゃんは、どんな気持ちでゆかたを縫い続けたのだろうか。」にしてみてもう感じていますか。
→発問の後、少人数での話し合いももったせいか、ほとんどの生徒がねらいに近い文章を書いていた。
- ・自分を振り返るとき、「お姉さんに『私の誇り』と言われたきいちゃんは？」と言われた側で発問した訳について教えてください。
→親側の気持ちでなく、子ども側からの気持ちで考えさせたかったから。
- ・ねらいを考えると「家族の一員として」を入れたいのであるが、そのことで価値にせ

まりにくくなる不安があった。

→きいちゃんに沿って進めるのであれば、きいちゃん自身が自分を家族の一員とっていないのでは、ということに気付かせれば、「家族の一員として」につなげることができるのではないか。



【自分たちでリレーをしながら発表する様子】

(2) テーマ研究

- ・各校実践資料紹介

(3) 指導助言（小林 秀雄 指導主事）

- ・導入のアンケートが資料に上手につながった。自分の家族への思いは人前でなかなか話せるものではないが、話せているのがいい。
- ・発表のリレーは使い方がよかった。失敗することもあるので気をつけたい。
- ・終末はさらりとしていて、押しつけがましくないのがよかった。
- ・中心発問は「きいちゃんが『うんでくれてありがとう。』と話したのは、なぜだろうか」だと思う。ねらいに一番せまるものがそれだと思う。
- ・中心発問の前には必ず押さえておくべき内容がある。それによりより価値にせまることができる。中心発問が決まったら文言(言い方)を考える。
- ・面会の時の母の愛情にも触れたかった。きいちゃんの気持ちにずれがあると話した生徒に問い返すと出たと思う。
- ・発問構成について

1. ねらいを絞る。

今日の資料は家族に愛されていることで構成。家族の一員については別資料で行う。

2. 中心的な場面を見つけ、中心発問を考える。

生徒の予想される反応ができない発問は、だめな発問である。また、予想される反応については他の教師に見てもらおうと、多様な予想を用意することができる。多様に用意することで予想される反応は精査される。

中心発問でねらいにせまるための前振りを仕掛けないと中心発問が生きてこない。

3. 導入、展開、終末を構成する。

今回家族について書くための質問は、「自分の家族について考えたことを書きましょう」で十分だったと思う。

4. 資料を離れる。

登場人物で考えていくと、自分を振り返るときにできないことが多い。生徒が人物の心情に入っていくことが必要である。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・十分な協議を重ね、発問や授業の構成などについて確認することができた。
- ・中心発問に用いる文言の大切さを確認することができた。

(2) 課題

- ・中心発問の内容をどのように吟味していくか、今後の授業を通して高めていく必要がある。
- ・資料に自分の心情を入り込ませて読み取るように指導していきたい。